

「コンタクト・ゾーン」における宗教文化の交差

16世紀から19世紀にかけての南北アメリカの植民地時代には、長期にわたる征服と植民地化の結果、各地で異文化の衝突が生じた。そこでは、先住民の言語・生活習慣・社会組織とヨーロッパ移民の宗教的・民族的アイデンティティが交差し、社会の諸領域は支配・不平等・対立によって構造化されていた。その後、南北アメリカ諸国が独立した後も、こうした対立は国民国家形成の過程や従属的な経済構造のもとで持続した。独立国家は、自らをヨーロッパの後継者として位置づけ、ヨーロッパと肩を並べるために、コロニアルな言説を継承・利用した。その言説は、不均衡な権力関係のもとで支配体制を正当化するのみならず、また単なる特定の立場の主張ではなく、「普遍的な真理」として位置づけられた。そしてそれは、ヨーロッパ・キリスト教文化を南北アメリカに強制的に根付かせる役割を果たした。

このように、複数の文化が遭遇する場面や、文化が争点となる社会空間を、文学・社会言語学者メアリー・ルイズ・ブラットは「コンタクト・ゾーン (contact zone)」と呼んでいる。ブラットによれば、この空間は異なる文化が衝突し格闘する場として特徴づけられ、植民地主義や奴隷制など、しばしば支配と従属という極端に非対称的な関係のもとで生じると指摘される。こうした空間には「強要、根本的な不平等、そして手に負えない葛藤」が伴うことが多いが、ブラットは同時に、支配と従属という非対称的な関係のなかでも、相互交渉的な関係性の構築が可能であること、さらに権力の不均衡下における共在、相互作用、絡み合う理解や実践の可能性についても言及している。このような現象は、単に植民地主義や奴隷制による政治・経済的抑圧の場に限らず、宗教運動や宣教活動の場においても生じうるであろう。ブラジル社会ではプロテスタントとカトリックという非対称的な宗教的要素が存在する中で、米国系プロテスタント教会の宣教師にとってのコンタクト・ゾーンとは、いかなるものであったのだろうか。

ダニエル・パリッシュ・キダーの功績と影響

まず、米国からブラジルへ渡った最初の宣教師として知られるダニエル・パリッシュ・キダー (1815～1891) について紹介する。

キダーは1815年10月18日、米国ニューヨーク州ジェネシー郡ダリエンに生まれ、幼少期のほとんどをバーモント州の親族のもとで過ごした。いくつかの学校を転々とした後、1836年にコネチカット州のウェズリアン大学を卒業した。翌年、彼はアメリカ聖書協会 (American Bible Society) によるブラジル布教の任命を受け、メソジスト派の宣教師として渡伯することを決断した。当時、キダーは中国行を希望していたが、中国ではすでにイライジャ・ブリッジマン (1801～1861) がアメリカ聖書協会の支援を受けて宣教活動を行っていたため、その希望は叶わなかった。ブリッジマンは日本にも多大な影響を与えた人物である。彼は初めて中国語で米国を紹介する著作『美理哥合省国志略』(1838年) を執筆した。この書物は、のちに日本の蘭学者・箕作阮甫によつ

て訓点が付され、『聯邦志略』(1861年) として出版された。『聯邦志略』は、開国期における西洋知識の浸透に大きく貢献し、日本の近代化を促した重要な書物のひとつとして知られている。

こうして、キダーは中国ではなくブラジル行を余儀なくされたが、彼もブリッジマン同様に大きな功績を残した。1837年から1840年にかけて、キダーはブラジルにおける米国系プロテスタント教会の伝道活動の火付け役の1人とされる。彼の著作である *Sketches of Residence and Travels in Brazil Embracing Historical and Geographical Notices of the Empire and Its Several Provinces* (1845) および *Brazil and the Brazilians Portrayed in Historical and Descriptive Sketches* (1857) は、米国においてブラジルを紹介した初期の書物として知られている。これらの書物は、米国におけるブラジル学の先駆的著作といえる位置付けにある。以前に触れたアメリカ南部人移民も、キダーの著作を参照することで、ブラジルの地理的環境、気候、土壌、生態、原住民インディオや黒人奴隷、白人社会の文化的特徴に関する情報を得ていた。

キダーの記述における批判的視点と留意点

彼の著作は、膨大な観察に基づく成果であった。1837年、わずか22歳でリオデジャネイロに到着したキダーは、当地で「聖書文書頒布者 (colporteur)」として福音宣教に従事した。ここでいう聖書文書頒布者とは、不特定多数の人々に聖書を配布する責任を負う個人を指す。キダーは1837年から1840年にかけてブラジルに滞在し、その間、南東部のリオデジャネイロ州から北西部のアマゾニア州へと赴いた。伝道活動の間には、自身の体験を記録することも重視した。いわゆる民族誌的記述を通じて、ブラジルの民衆文化や文芸、さらには政治思想に関する詳細な情報を収集・記録している。

先述の2つの著作は、次回に考察する予定の主要な支点となる。そこでは、キダーの記述を手がかりとして、ブラジルにおけるプロテスタント教会の本格的な組織化に至る諸要因を明らかにすることができる。言い換えれば、伝道活動の現場、すなわちコンタクト・ゾーンにおける異なる文化の衝突と格闘の場において、どのような布教戦略が展開されたのかを再考することになる。この考察にあたり、キダーの言葉がもつ批判的視点にも注目したい。彼の記述には一定のバイアスや視野の狭さが見られる場合があり、その背景には、これまで触れてきたマニフェスト・デスティニーにおける「脱カトリック化」の思想が影響している。したがって、誤謬的な記述も含まれている点に留意しつつ、彼の著作を精査していくことにする。

[参考文献]

Vasni de Almeida, José Neto Sousa Gomes. “Daniel Parish Kidder: sociedade, identidade e cultura nas narrativas de um protestante viajante no século XIX.” *PLURA, Revista de Estudos de Religião*, vol. 7, no. 2 (Jul-Dec 2016), pp. 94-120.

Mary Louise Pratt. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge, 1992.